



平成30～31年度調査研究（1年次）中間報告



埼玉県立総合教育センター 生涯学習推進担当

1 調査研究の概要

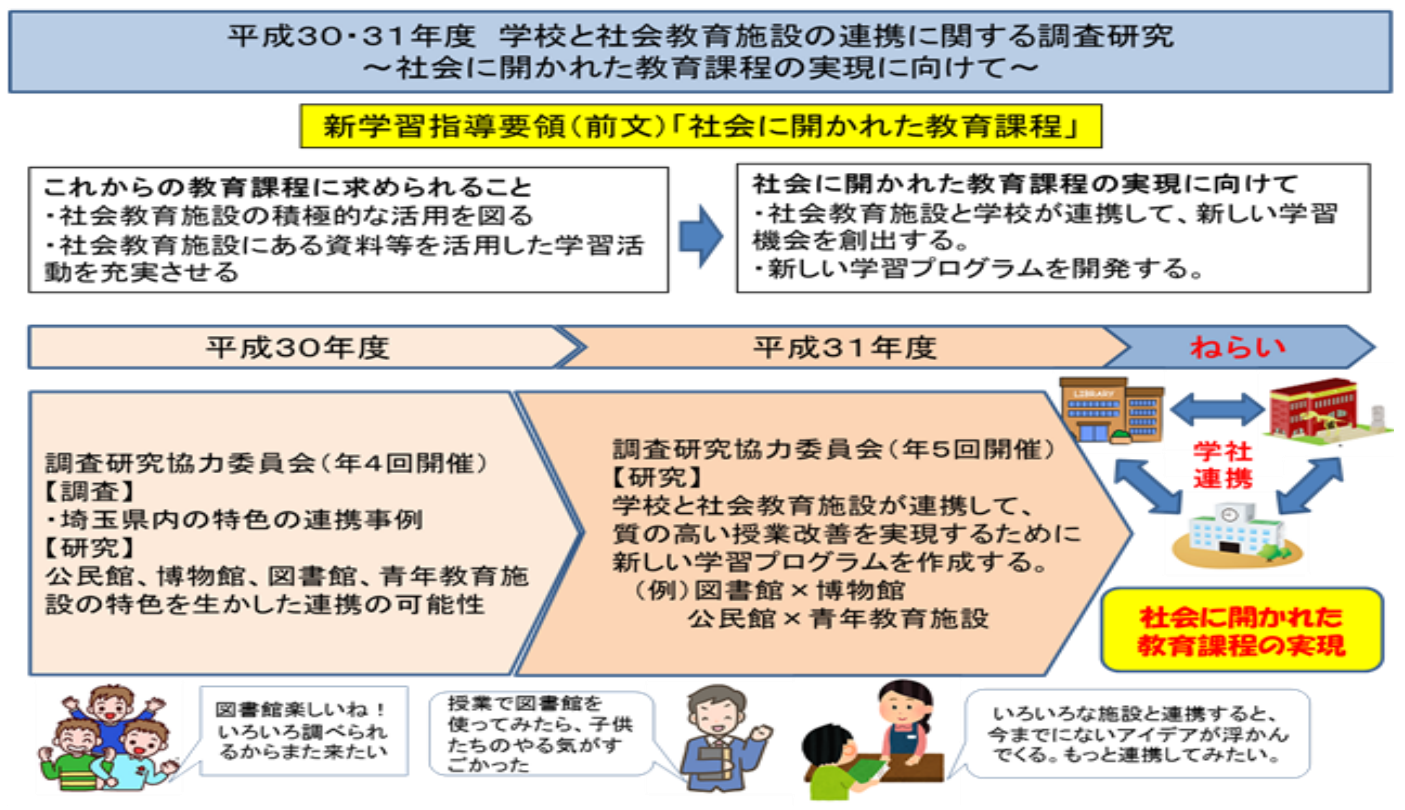
平成29年3月に告示された次期学習指導要領の前文に「社会に開かれた教育課程」の理念が示された。子供一人一人に「生きる力」を確実に育むためには、学校が目指すべき教育の在り方を社会と共有し、社会と連携・協働の下に教育活動を充実させ、教育課程を編成することが必要であるとしている。これは学校と社会教育の連携に大きく踏み込んだ内容であり、学社連携、学社融合を加速させるものといえる。

また、総則では、主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善につながるとして、具体的な方法が示されている。地域にある図書館、博物館、公民館、青年教育施設等の社会教育施設と連携し、それらの施設を活用したり、施設にある資料を活用したり、施設やその関連団体の人材を活用したりすることにより、学習活動を充実させるとしている。

各社会教育施設では、子供向けの事業を展開しており、司書、学芸員等の専門職の下、子供たちの知的好奇心を引き出す取組が行われている。そして、学校の授業にも活用できる資料を有しているほか、サークル活動などを通じた人材の育成も行っている。それらを学校で活用することは、主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善を図る上で大変効果的であるといえる。学校にとって社会教育施設との連携は大きなメリットがある。

一方、各社会教育施設が学校と連携することは、各社会教育施設にとって子供がどのような学習内容を、いつ、どのように学んでいるのかを知ることができ、子供向け事業の見直しなどに役立つ。また、連携を通じて、子供たちが地域の社会教育施設を知り、それを活用するきっかけづくりにもなる。社会教育施設にとっても学校との連携は大きなメリットがある。これにより学校を核とした地域の教育体制の拡充が進み、地域の大人と子供が学び合い、地域コミュニティが活性化されることも期待できる。

このように学校と社会教育施設の連携は、双方にとってWIN-WINの関係を構築できるものであり、この連携の促進に向け、本調査研究を始めることとした。



2 県内の学校と社会教育施設の特色のある連携事例

朝霞市博物館〔博物館利用授業〕

主体的・対話的で深い学びを実現する

朝霞市内の小中学校を中心に、学校教育における授業での博物館利用の促進を目標として実施している。博学連携を推進することにより、朝霞で育ったことを誇りに思う児童生徒の育成を目指している。

小学校1年生では、国語科の「たぬきの糸車」と連動した糸車体験を実施している。小学校3年生では、社会科の地域学習と連動した昔の道具体験及び展示調べ学習を実施している。そして小学校6年生では、歴史学習と連動した原始古代体験及び展示調べ学習を実施している。小学校1年生、6年生については、博物館職員が学校へ出向く出前授業の形で実施している。小学校3年生については、市教育委員会の予算でバスを手配し、博物館を会場として実施している。



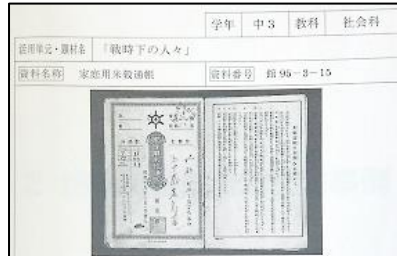
小学1年生の糸車体験



小学3年生による展示調べ学習



出前授業における火おこし



学年・教科を示した資料目録(中3)

【成果】

- ・市内全小・中学校から1名ずつの教員が博物館利用検討委員会に参加することにより、継続的な取組として定着している。
- ・施設の活用だけでなく、博物館の資料と教科書を結びつける取組も行なわれており、博物館の資料を授業で使う道筋ができています。
- ・博物館を利用しているサークル活動を通じて育成した人材を博学連携に活用するなど、様々な角度から学校支援が行われている。

志木市いろは遊学館〔いろはふれあい祭り〕

地域全体の教育力の向上につながる

いろは遊学館は小学校・公民館・図書館の3つが同じ建物にある複合施設となっている。これは、子供たちを「地域ぐるみ」で育てていくことを目指し、地域におけるコミュニティの拠点を形成するために作られた。

「いろはふれあい祭り」の初日は、関係者全員が体育館に集まり開会式が行われた。ここでは志木小学校の児童が合唱・合奏を披露し、「いろはふれあい祭り」がスタートした。2日目は志木小学校の児童の作品展示をはじめ、公民館利用サークルのバルーンアート体験や将棋体験などのブース出展、PTAバザー、志木小学校の先生方による催し物などが行われた。



利用サークルの作品展示



小学生による合唱・合奏披露



バルーンアート製作



サークル利用者による作品展示

【成果】

- ・小学生にとっては学校での学びを地域の大人へ披露する機会になり、地域の大人にとってはサークルでの学びを生かして子供たちに教える機会になっている。互いにとって学びの一つのゴールであり、日頃の学習意欲を高めている。
- ・学校だけが学びの場ではなく、図書館、公民館なども学びの場であるということを知ることが出来る。

入間市博物館 ALIT〔博物館授業〕

郷土への愛着と誇りを育成する

入間市教育委員会の基本目標「ふるさと入間を愛する心の育成」を目指し、小中学校9年間の博学連携の推進を通して、ふるさと入間への愛着と誇りを持つ子供の育成を図っている。

小学校3年生では、社会科の「昔の暮らし」の学習の一環として、「むかしの暮らしと道具展」の見学や体験学習を実施している。小学校6年生では、社会科の「地域の歴史」の学習と火起こし体験を実施している。そして中学校1年生では、総合的な学習の時間として「茶席体験」を行っている。

平成6年の開館当初から博学連携を進めているが、茶席体験事業については、平成24年度から開始した。博物館が、学校から博物館への貸し切りバスの予算を確保して実施している。



茶室で茶席体験



市茶道連盟の方々による指導



博物館の庭園内にある茶室



中学校区の歴史を学習

【成果】

- 地元で生産した狭山茶を使用した茶席体験、教科書と結びつけた地域の歴史を学ぶことにより子供にふるさとへの愛着と誇りが育成される。
- 中学校ごとに内容を変えて、地域の歴史学習を行っている。その中学校区における歴史を学ぶ。生徒たちにとって馴染みのある場所が登場するので、親近感がわき、興味を持って学んでいる。生活に根ざした歴史を学ぶことにより、より地域のことを誇りに思えるように工夫している。

ふじみ野市上福岡公民館〔公民館体験教室〕

生涯にわたる学びのきっかけづくりとなる

子供たちに地域の文化を理解してほしい。そして子供たちに地域の公共施設を知ってもらい、そこで大人の学習活動が行われていることを知ってほしいということから、平成7年から実施している。

小学校3年生が授業の一環として徒歩で公民館に来て、午前半日の体験教室を実施している。当日のプログラムは、公民館長による公民館の説明、大ホールでのステージ体験（校歌斉唱）、館内見学、学習体験（90分）となっている。

学習体験については、公民館利用団体の協力により、俳句、絵手紙、ダンス、和太鼓、茶道、太極拳等を体験している。



館内見学



大ホールのステージ体験



茶道サークルによる学習体験



太鼓サークルによる学習体験

【成果】

- 子供たちが公民館のことを知り、子どもまつりや異年齢学級「ふくっ子クラブ」に多くの子供が参加している。
- この体験がきっかけで将棋や太鼓教室等のサークル活動に参加する子供もいた。
- 公民館利用サークルにとっても、子供に自分たちの学びを披露する恒例行事になっており、活躍の場となっている。

平成10年度に旧白岡町立図書館と町内学校図書館の図書の電算化を実施し、それにより、町と各学校間の図書の検索が可能となった。それをきっかけに学校と町立図書館で連携する機運となり、この学校訪問ブックトークが始まった。

図書館としては、ブックトークを通して学校とつながることで、図書館が直接、子供たちに本を届けることができるのではないかと考えた。

最初はブックトークのみであったが、学校からの要望により、図書館の利用方法、日本十進分類法による図書の整理、ポプラディア等の百科事典の使い方、ビブリオバトルなど実施内容は多岐に広がっている。また、夏季休業中に教員の校内研修会に呼ばれることもある。

白岡市立篠津小学校では小学校3年生を対象にして、小学校5年生で学ぶ「本のポップづくり」へ向けて、絵本にキャッチフレーズをつける授業を実施した。最初にポップとは何かについて、図書館ボランティア（元教員）の方が説明をした。そのあと図書館職員が実物のポップを見せながら、その特徴を伝えた。そして子供たちが5冊の絵本の中から1冊を選び、図書館ボランティアが絵本の読み聞かせを実施した。読み聞かせを聞いた後、子供たち一人一人が思いのこもったキャッチフレーズを作り、それを発表した。

白岡市立図書館では、毎年、校長会で学校訪問ブックトークについて説明し、参加希望校を募っている。



実物のポップを見せて説明



ボランティアによる読み聞かせ



学校と図書館が協働した授業



ポップを手にとって見る児童

【成果】

- 本を読むことが生活の一部に当たり前にある子供を育成している。
- この授業に向けて、自主的にポップを作成してきた児童がいるなど、子供たちの本に対する興味・関心を確実に高めている。
- 本の分類にまで視野が広がる子供もおり、読書の幅を広げることにもつながっている。

3 調査研究の中間まとめ

次年度に新しい学習プログラムを作成する上で、次の6つの視点を重視して作成していく。

①育成される子供像を共有し、学びが社会とつながる

学校と社会教育施設がゴールを明確にし、それを共有することにより、協働した教育活動が可能になる。

②体験的な学習活動を通して、主体的・対話的で深い学びを実現する

社会教育施設の持つ人的・物的資源を活用して、学校ではできない体験的な学習活動を行い、主体的・対話的で深い学びを実現する授業を作る。

③役割分担を明確にし、それぞれの専門性を生かす

専門的な知識、技能を持つ社会教育施設、教える技術を持つ学校が、明確な役割分担をして、協働した授業を実施する。

④学校の教育課程に位置付け、授業と地域がつながる

授業と地域の教育資源を結びつけることにより、子供と地域をつなげるとともに、教員一人一人が地域とつながることの必要性を理解する。

⑤子供の学びを見届け、互いに評価し、次へつなげる

連携を通して子供たちがどのように成長したか、互いに評価し、PDCAサイクルを回して、プログラムを更新する。

⑥学校と複数の社会教育施設が連携することで、地域連携を促進する

各社会教育施設の特徴と強みを生かし、それぞれの人的・物的資源を出し合い、共通の目標をもって学校と連携している。

来年度は、これらの視点から新しい学習プログラムを作成し、学校と社会教育施設の連携を促進させ、社会に関われた教育課程の実現を目指したい。